

創立 60 周年に当たって

慶応義塾体育会バドミントン部部长 高宮 利行
(文学部教授)

バドミントン部の創立 60 周年おめでとうございます。関係者の皆様とこの記念すべき節目を分かち合えることを心から喜んでおります。

人間でいえば還暦に当たるこの 60 年という年月は、長いようでもあり、また短くも感じられるのは、わたしだけではないでしょう。とりわけ前部長の平先生のあとを引き継いで部長に就任するやいなや、創部 50 周年を祝う式典に参加したわたしにとっては、この 10 年間はあっというまの出来事でした。



バドミントン部の OB の中には、既に還暦を越えた方、またまもなくという方も多いことでしょう。戦後の日本の大きな変化の中で、バドミントンを愛し、プレーし、応援してこられた方ばかりだと思います。個人的な体験で恐縮ですが、かくいうわたしも、昭和 37 年に卒業した麻布高校では、バドミントンのプレイング・マネージャーでした。その当時、慶應はじめ各大学に進学して現役として活躍していた OB がコーチに来てくださったおかげで、インターハイにも出場できたのです。わたしは慶應に入学すると、バドミントン部には入部せず、日本バドミントン協会が東京で開催したユース杯、トマス杯の運営のお手伝いをしました。世間知らずだったわたしは、このとき多くのことを学びました。知り合った関係者の中には、いまもお付き合いが続く方もおられます。スポーツの縁の強さを感じずにはられません。

さて、スポーツにおけるアマチュアリズムという言葉は、もはや死語に近くなりました。19 世紀イギリスのジェントルマン階級が作りだしたこの精神は、1 世紀ほどしか持ちこたえられなかったのです。こんにち人々が夢中になるスポーツは、サッカーのワールド・カップであり、イチローや野茂らが活躍するプロ・スポーツばかりのように見えます。アマチュアリズムの牙城だったラグビー関係者からも、この言葉を聞く機会も少なくなりました。金銭的なまた世俗的な栄光を求めることなく、好きだからこそすべてを犠牲にしてもプレーする、という贅沢な精神は消滅してしまったのでしょうか。

バドミントンという、世間的には依然として「マイナー」なスポーツでは、まだまだこの言葉は生きています。勉強時間を削り、睡眠時間を削り、アルバイトに精出すこともなく、大学 4 年間のすべてをバドミントンの練習と試合に明け暮れる——貴重な青春をこうやってひとつのことに打ち込める学生諸君は幸せです。もちろん、理想どおりにことが運ぶとは思えません。さまざまな葛藤があるはずですが、その中から人間として学ぶものが多かったことは、OB の方ならよくお分かりでしょう。

還暦と呼ばれる人間の 60 歳は、耳順と呼ばれることがあります。これは『論語』に現れる言葉で、『広辞苑』によると「修養ますます進み、聞く所、理にかなえば何らの障害なく理解しうる意」とあります。バドミントン部も 60 年前の創部の精神に戻ると同時に、今後どうあるべきかを内外の声に耳を傾けながら、それを理解し、70 年、また 100 年と末永く続いてもらいたいと願っています。

今回の 60 周年行事の企画や実践につきましては、OB 会長はじめ多くの方々にお世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

慶応義塾高等学校バドミントン部部长 遠藤 耕一

大学の体育会バドミントン部が創立 60 周年を迎えられたことに対して、心よりお慶び申し上げます。これも、現役大学生の皆さんの日々の活動に加え、部長の高宮先生、歴代の部長先生、三田バドミントンクラブの会員をはじめとするOBの皆様のご尽力の結果であると拝察いたします。

大学の体育会バドミントン部からは、高等学校バドミントン部のためにコーチを選出していただいております。このことについても、高等学校の部長として、この場をお借りして御礼申し上げます。



表 1 にはこの 10 年間にコーチとして名簿に登録された方の氏名を記しましたが、その多くが体育会バドミントン部の方です。合宿時等に、親身になって丁寧に、そして時には厳しく高校生の中に入って指導されている姿や、高校生が多くのことを吸収しようと、大学コーチの説明・指導に熱心に耳を傾けている姿が思い出されます。また、高等学校(塾高)出身者でない方がコーチになってくださったたり、コーチ以外の多くの社会人・大学生の方にご指導頂けるのも、大変ありがたいことであると感じております。

私が現役大学生の皆さんの試合を観戦する機会は早慶バドミントン定期戦のときくらいなのですが、そこで真剣にプレーしている姿は、高校生にとって何よりのお手本になっていると思います。また、試合前のウォーミングアップのときに見られる、集団としての規律ある行動も見習うべき点が多くあります。さらに、OBの皆様が対稲門バドミントンクラブ戦において一生懸命かつ楽しくプレーしている姿を見ることも、高校生には貴重な機会であると思います。

ここで、高等学校のことについても少し触れさせていただきます。生徒は週に 5 日(月、火、木、金、土)、日吉会堂で練習を行っています。そして、表 2 に示した日程で年間の試合を行なっています(平成 9 年度より神奈川県私立高等学校バドミントン大会が加わりました)。夏季大会では平成 11 年度から、部員数が少なく学校対抗戦が行なえない学校のために、複数の学校による合同チームでの参加を認めるようになりましたが、幸いなことに、高等学校ではここ数年、部員の多い状況が続いており(表 1 参照)、平成 13 年度は A~E の 5 チーム編成で大会に臨んでいます。しかし一方で、高等学校バドミントン部出身者が大学で体育会バドミントン部に入部していない状態が最近では続いております。それにもかかわらず、高等学校バドミントン部を暖かく見守り、ご指導いただいていることに改めて感謝いたします。

最後になりましたが、体育会バドミントン部のますますの発展と関係者の皆様のますます

すのご活躍を祈念いたします。

表1 高等学校バドミントン部のコーチならびに部員数

年度	コーチ(敬称略)				
			3年	2年	1年
1992(平成4)	前期	巽弘樹	9	7	5
	後期	巽弘樹			
1993(平成5)	前期	巽弘樹、三富彰雄、三尾仁志	7	6	2
	後期	巽弘樹、三富彰雄、小林雅史			
1994(平成6)	前期	小林雅史	5	4	8
	後期	小林雅史			
1995(平成7)	前期	小林雅史	4	8	3
	後期	山元大典			
1996(平成8)	前期	山元大典	7	4	6
	後期	山元大典			
1997(平成9)	前期	山元大典	4	7	11
	後期	岩崎信也			
1998(平成10)	前期	岩崎信也	6	11	10
	後期	三壁敏隆			
1999(平成11)	前期	三壁敏隆	11	9	9
	後期	三壁敏隆			
2000(平成12)	前期	三壁敏隆、安藤雅俊、本村俊樹	9	9	14
	後期	三壁敏隆、安藤雅俊、本村俊樹			
2001(平成13)	前期	三壁敏隆、安藤雅俊、本村俊樹	9	10	18
	後期	脇森浩志、安藤雅俊、本村俊樹			

表2 高等学校バドミントン部の主な試合日程

	大会名	試合形式
4月	関東高等学校バドミントン大会神奈川県予選	学
5月	全国高等学校総合体育大会バドミントン競技神奈川県予選	S・D・学
7月	神奈川県私立高等学校バドミントン大会	学
8月	横浜市高体連夏季バドミントン大会	学
9月	早慶バドミントン定期戦	学
9～10月	神奈川県高等学校バドミントン新人大会	S・D・学
1月	横浜市高体連冬季バドミントン大会	S・D・学

S:シングルス、D:ダブルス、学:学校対抗

体育会バドミントン部と女子高

慶応義塾女子高等学校バドミントン部部长 喜多村 隆

創部60周年おめでとうございます。永き良き歴史を心よりお慶び申し上げます。また、そこに薫り立つ伝統を羨ましいものと感じ入る次第です。

私が女子高部長の任に就きましたのは86年4月からですが、私自身に競技歴があるわけではありません。従って、いわば俗にいう人事顧問に過ぎない存在です。ただ、大学体育会バドミントン部に対する尊敬心と女子高バドミントン部に対する愛情を強く抱いているという、それだけの心情で筆を執らせていただいております。以下は、そのような素人の雑感であります。



私が顧問になってからの十余年間に、女子高バドミントン部を経て大学体育会バドミントン部を卒業した者を挙げれば、酒井(現、古屋)香世子・鈴木紀子・小澤(現、松村)さち子という同期を筆頭に、寺島智美・小島(現、藤澤)美和・山本順子・須賀(現、佐々木)弘子・米谷香里と続く系譜が辿れる。これらの7名が残した軌跡はそれぞれに輝いている。しかし、歳月に比してその部員の絶対数は決して多いとは言えないだろう。

高校のクラブ活動には、技術の向上と楽しみのどちらに比重を置くかという問題が常に潜んでいる。もちろん相互は連関するものであり、楽しいからこそ続けられるし、ゲームに勝てば嬉しい。但し、施設の制約上、女子高での練習時間は限られたものである。所詮その上限は見えてしまうのかもしれない。それでも彼女たちの内には上手になりたいという気持ちは確実に存する。しかし、それが大学での競技生活に継続されない。体育会へと志向しないのは、彼女たちの気質にのみ起因するのだろうか。バドミントンの好きな女子高生が体育会に関わるにはどのような環境が必要なのか、これは私どもの課題でもある。併せて、義塾一貫校のすべてにバドミントン部があるわけではな

い。学校によって事情が異なるから一言で括ることは危ういが、その環境が整えられていないことはいかにも惜しい。

大学と女子高とを結ぶ最も太いラインは、コーチの存在である。毎年体育会から派遣していただいている。私にとっても歴代のコーチ諸君はそれぞれに懐かしい。女子高生のバドミントンへの情熱の傾斜は、コーチの資質が大きく関与する。しかしコーチも現役の選手であり、彼らにも自らの練習があつてそうそう潤沢に時間はとれないという事情もある。それでも合宿に際しては必ず何らかの形でコーチ指導の役割をこなしていただいている。

そのような状況の中にあつて、女子高には永年お世話になっている方がいる。それは小柳尚久君と草場律君であり、その存在は圧倒的である。小柳君が練習場に入るだけで充実度が一気に上昇する。その指導力は卓越している。生徒は彼に叱られて巧くなり、誉められて上を目指す気にさせられる。教師の視座からしても、その呼吸はうまいの一言に尽きる。一方、草場君は打ち上げの帝王である。趣向を凝らしたゲームと草場ダンスで盛り上げてくれる。但し、コート上の彼はどこまでも大真面目である。女子高生を同等のプレーヤーと見なす。その熱い想いは生徒に伝わる。お二方の聲咳に接することができたか否かが、その後の女子高生のバドミントン人生を左右すると断言してもいいほどである。

さらに女子高特別顧問としては、文学部の関場武先生(現、理事)の存在もある。そのお仕事の多忙さから無理もないのだが、それこそ忘れた頃にふらりと女子高体育館に姿を現し、自らラケットを振って指導して下さるという光景があることを付記しておきたい。

結びに、大学体育会バドミントン部の益々の発展と、今後とも女子高バドミントン部とのこまやかな関係が続くことを祈念して、擱筆することとする。

三田バドミントンクラブ会長 吉田 格磨 (昭和32年卒)

我が慶應義塾体育会バドミントン部は60周年を迎えてご同慶の至りであります。私も68年の人生で60周年に関わりを持たた事は生涯の誇りであります。

この間ご指導を賜りました、歴代部長及び学校関係者並びにOB会の皆様へ感謝申し上げますと共に、皆様にお喜び戴くことができ有難く、感慨深いものがあります。草創期時代の輝かしい戦歴をもってバドミントン界をリードし、発展に寄与してまいったと申しても過言ではありません。しかしその間にあつてコートの問題、資金問題などいろいろな壁にあたりながら常に先輩、現役の協力があつて現在に至っております。特に戦績においては三部降格等、部員の減少に伴い選手層が薄く、残念ながら大変現役も苦勞をしております。しかし当部は過去の戦績にこだわらず、一步一步前進しております。



特に最近はOB・現役が一体となり組織強化を図り頑張っており、近い将来必ず男女とも一部に復帰すると信じております。

世界的な不況、テロ事件、民族戦争等問題の多い 21 世紀ですが、何事にも負けず前進あるのみです。創部 60 周年を機会にOB・現役が一体となり当部の躍進に向かって頑張りたいと思いますし、日本バドミントン界の先駆者として、その誇りを忘れず普及に寄与したいと考えております。

最後に皆様方におかれましては健康に留意され、尚一層のご活躍を祈念する次第であります。

「熱き想い」

前監督 鎌田 喜久
(昭和56年卒)

慶應義塾体育会バドミントン部創部 60 周年を迎え、心からお喜び申し上げます。

日本のバドミントン界の先駆者として数々の足跡をしるし、諸先輩方の熱き想いに支えられ今日新たな節目を迎えし事は、誠に感慨深く、またその伝統に培われし我が部は現役、OBメンバーの大きな誇りである。



1992 年元監督清水政明先輩より突然後任の監督として打診があり、当初はとても困惑した。1981 年に卒業後、海外に足かけ5年間程在住し、その間はもちろんその後もほとんどバドミントンとは無縁の生活であり、果たして小生ごときで部の監督という大役が務まるのか非常に不安であった。仕事も忙しい時期にあり、当初は監督就任を固辞していた。しかし清水先輩の執拗(?)なる説得により受諾することとなった。

徐々に日吉の丘に現役諸君を見に行った時、懐かしさを憶えたのと同時に、自分自身の現役時代の思い出が瞬時によみがえってきた。部室から薄暗い通路を通り、記念館に入った瞬間何ともいえぬ緊張感がほとばしった。大学生活のほとんどの時間をこの体育館で過ごしてきたといっても過言でないその空間が再び自分自身に熱いものを投げかけてきた。私の現役時代は、部員数も多く下級生の時期は、なかなか長時間コートに入ることが出来なかった。特に練習が好きなタイプでもなかったこともあり、コート外での基礎体力・筋力アップなどの練習が多く非常に閉口しながら毎日を過ごしていたような気がする。1992 年に奥出主将の時には、部員総勢で 15～16 名であった。現役を退いてから 10 年後に改めて部に戻ってみた時の印象は、その様変わりにより多少戸惑いを感じたものであった。自分自身が現役の時代は、とても体育会的な要素が強い部であったが、時代の流れとともにそういった要素はかなり薄れていた。練習自体もあまり緊張感がなく、部員数も少ないことも相まって活気が無い感があった。主将である奥出君も4年生では女子の寺島君と2人だけであり、練習もかなり苦労しているようであった。自分自身も、卒業後 10 年の体力低下は如何とも

しがたく、もっぱらコートの外で現役諸兄のプレーを見る側に廻り、コーチ陣に相手をしてもらっていることがほとんどであった。しかし、コートの外から見ていると意外とプレーしている時には気付かなかった色々なことが見えてきた。個々のプレーヤーの癖やいい点悪い点など冷静に見て感じるこ

とが出来た。それらのことを主に練習では指導していった。

学生の試合は、現役時代はあまり感じなかったが、年間を通じてかなりの試合数になる。春秋のリーグ戦、東日本選手権、新人戦、早慶戦、全日本学生選手権等々年間を通じてスケジュールが組まれており、それぞれの目標に向かって練習をしているのだが、ともすると目先の試合のことだけが重点的に扱われ総合的なレベルアップを図るための基礎練習や基礎体力の強化などといったものがおざなりになりやすかった。自分も現役時代にはあまりそういった面での強化練習が好きではなかった。しかし実際に試合において結果がでてこないのはそういった面でのトレーニングがやはり重要なのではないのだろうか。選手層も薄く即戦力となる選手が得られていない時こそ、試合に勝つためには全体の底上げをはかる必要があった。

1992年度にはリーグ戦において3部で何とか優勝する事が出来るようになった。団体戦は個人個人の試合も大切であるが、やはりチームとしての勢いが必要であることを感じた。個人プレーであるバドミントンにおいてもやはり全体が目的意識を持って戦う時とそうでない時とではやはり結果も違ってくるものだ。1993年には、3部で優勝し入れ替え戦でも、あと1つ勝てば2部昇格というところまで相手を追いつめたが、最後の一步が届かなかった。非常に悔しい想いを今でも憶えている。1995～1996年にかけても団体戦での成績は3部で上位に位置するもなかなか2部昇格というところまではいかなかった。

1996年度を最後に監督の任を解かれてから久しく日吉にも行っていないが、たまには顔を出そうと思いつつ足が遠のき申し訳なく思っている。現役諸君は、大学生時代のわずかな時間ではあるが我が部に在籍したことがきっと人生の大きな糧となる日が来るであろうからその日のためにも日一日を大切に生きていってほしい。「練習は不可能を可能にする」小泉先生の名言ではあるが、日々の努力を怠らずこれからの練習に、勉学に励んでいって欲しい。

最後に監督在任中は、先輩諸兄をはじめ多くの方々にご支援いただいたことを大変感謝し皆様のご多幸とバドミントン部が益々発展していくことを祈念して筆を置きたい。

監督より、バドミントン部創立60周年に当たって

監督 森下 一夫
(昭和54年卒)

慶応義塾バドミントン部創立60周年、おめでとうございます。ご指導いただいた部長先生をはじめ、学生バドミントン界の中心となり活躍された諸先輩方、部の発展・存続に貢献いただいた後輩の皆様に、深く敬意を表したいと思います。



監督を拝命してから6年目を迎え、伝統ある我が部の監督として、あらためて身の引き締まる思いで胸の中がいっぱいです。大学を代表する体育会運動部の一員として、精一杯努力して、より良い成績を挙げていきたいと思えます。

<監督就任までの経緯>

大学卒業後、サントリーバドミントンチームの監督をされていた山本次生さん(1969年卒)より、宮崎克巳さん(1978年卒、現三洋電機バドミントン部監督)に続いて、コーチとして招かれた。8年間チームの強化に努めた後、4年間のシドニーの海外勤務などを経験して、1993年春に帰国した。シドニーではバドミントンラケットを握る機会がなく蓄積していた体力もだいぶ衰退していたが、6月の蒸し暑い日に久しぶりに塾バドミントン部がどうなっているかなと思い、日吉の記念館を訪ねたところ、いきなり清水聖君(1996年卒)とシングルスをさせられて、ふらふらに振り回された記憶が鮮明に残っている。それから、現役学生に負けないようにと、再び毎週欠かさずに練習に顔を出すようになった。当時、リーグ戦男子が3部から2部へ上がる入替戦に毎回チャレンジしながら、勝てなかった時期である。現役学生の練習相手をしながら、自分も次第に若さや元気を取り戻していったように思う。

<監督5年間のチームを振り返って>

1997年に鎌田監督よりバトンタッチし監督に就任した当時、大越、石塚、鬼島、川野ら4年生主体で男子は3部優勝争いをしていましたが、1年生男子ゼロ、女子は1~4年生で3名しかいないという『部員不足』の危機を迎えていた。せつかく入部した、将来有望な学生が退部してしまうと言う悲しい事態も何度となく経験した。1998年には、部員数が男女合わせて14名となり、早慶戦では人数不足という事態となり、口惜しい思いをしたが、リーグ戦では坏、三輪、岩崎らの4年生主体という布陣で、なんとか男子3部をキープした。そんな中で、なんとか強い選手を獲得したいとの思いで、インターハイに出向いたり、各地の高校の先生を頼りに受験生を探った。その年から徐々に受験対策を重ね、藤沢AO入試で、岩部、辻、田添、野村と高校時代に活躍した選手を毎年連続して1名ずつ、獲得することができた。女子は岩部の加入が大きく、山本(順)らの踏ん張りで4部から3部に戻ってきた。1999年には4年生が女子2名のみという状況で、大学5年目の石田に主将をしてもらうことになった。2000年には、部始まって以来初めて主将を女子の岩部をお願いした。女子は野村の加入で、3部で激しい優勝争いをしたが、あと1ポイントのところ破れ、2部昇格のチャンスを逃してしまった。2001年になると、部員もなんとか20名を数えるようになり、辻、三壁、田添の頑張

りで、男子3部の上位につけることができた。5年間に渡り、毎年2部昇格を目標にしてきたが、未だ3部優勝も果たせないのが、無念でならない。

<チームの目標と強化について>

学生のひとりひとりが人間的に成長し、強くなりたいという意識を向上させることが、監督としての最大の使命と考えている。当面の目標は、リーグ戦で男女とも3部から2部に這い上がること。男子はこの10年間、リーグ戦で3部に留まっている。女子にいたっては15年間も2部から遠ざかっている。2部に上がれば、1部とも試合会場が同じであり、もっと上を目指す意識が高まるはずである。

4年間という限られた時間内に、いかに現役学生の実力を向上していくかを考えなければならない。4年間で高校時代から活躍した選手に追いつき追い越すことは、普通の練習だけではなかなか実現できない。学生には、常日頃言っていることだが、どうすれば強くなるかを自分で考え、各人が質の高い、量の多い練習を毎日積み重ねていくことにより実力をつけ、そして多くの試合経験を積んでいくことが大切である。

もちろん可能な限り、優秀な新入生獲得を模索しなければならない。しかし、AO入試での受験対策を続けていくが、人数は期待できないのが現状である。塾高・女子高の出身者が現役学生にゼロという現状を考え、今後は塾高生や女子高生の強化にも努め、大学に進んでも続ける道を作っていくことが大きな課題と考えている。

学生諸君と一緒にあって、大きな目標を果たす喜びを是非分かち合いたいと思います。最後に、慶応義塾バドミントン部の発展を祈るとともに、皆様の益々のご指導をよろしく願いいたします。

部創立60周年にあたって(雑感)

前コーチ 諏訪 隆博
(平成3年卒)

自分は78年に小学4年生(当時10歳)でバドミントンを本格的に始めたが、そのきっかけとして、そのとき既に塾体育会バドミントン部にお世話になっていた兄の存在が少なからず影響したものと、今でも思う。

始めた頃は、幼いながらもバドミントンの楽しさと厳しさの両面を感じていたような気がする。そして、中学・高校と進んでいくに連れて、自分の生活の中でバドミントンの占める比重が高くなっていった。それは、少しずつながら着実に積み上がっていく実績と、それに満足しない自分との葛藤を唯一鎮めることの出来る方法が「練習」しか無かったということなのかもしれない。

高校2年頃、「進学」を考え始めたときに、それまであまり意識されなかった「慶応義塾」という存在が、急激に大きくなってきた。その後、幾つか頂いたバドミントン有力校からの誘いに自分の学力に不安もあった。決して兄に強要された訳ではない。当然、受験という現実を前

にも揺れた。ただ、最後まで「慶応義塾」が頭から離れない。「その自分に正直になろう」と決め、全ての不安と戦いながら受験に挑戦。



87年、慶応義塾へ入学し、何の迷いも無く塾体育会バドミントン部に入部。ここから、新しい自分の歴史がスタート。兎に角、四六時中「バドミントンが強くなるには」ばかり考えていた。OB 諸先輩方や部員、体育会の仲間と飲むときも、話題は「慶應バドミントンとは？ 塾体育会斯くありき！」ばかり。熱い思いがほとばしった議論は、今考えると少々照れくさいが、何ものにも代え難い思い出である。そんな中で過ごした4年間、実績として満足のいくものではなかったが、当時切磋琢磨し合った先輩・同期・後輩との「衝突」「感激」は、一瞬一瞬が真剣勝負であったことの証と思う。特に、3年・4年時と伝統の慶早定期戦で永遠のライバル「早稲田」を2年連続で倒したときのあの喜びは脳裏から離れない。そして何よりも、バドミントンを中心とした学生生活は、今の自分の環境から思えば、夢のような珠玉の時間であった。

91年に無事(?)卒業し、就職。自分なりに、当初、バドミントンと直接的に関係していける職場環境を強く希望していたが、紆余曲折を経て、現在の会社に就職。ここから、自分にとって塾体育会バドミントンとの新しい関係がスタートする。

汗と思い出の詰まった日吉記念館に週末ごと精一杯通う。現役当時自分がしたように、今の現役のみんなとコート内外で真剣に向き合う。シャトルを通じて会話する。練習について真剣に議論する。泣く、笑う。これは自分にとって、いわば「恩返しと新しい時代への挑戦」である。

卒業以降、今も変わらないのは、自分を成長させてくれた「慶応義塾」そして「体育会バドミントン部」に対する深い感謝の念。現役時代には漫然として意識されなかったものの、豊かな人間関係の中での生活は、今の人生の精神的な基礎になっている。自分が現役時代に受けた OB 諸先輩方からの多くの愛情を、自分も後世の仲間に注いでいきたい。

そして、何よりも、60周年を迎える塾体育会バドミントン部が、次の10年、そのまた次の10年と、着実にその歴史を刻み続けていくこと。社会環境の変化に伴う価値観の多様化が著しい現代においては、歴史ある塾体育会そのものが、古い価値観に埋没しかねない。逆に、どんなに時間が経とうとも変わってはいけない価値観もある。自分は、時の流れに伴う受け容れるべき価値観の変化を感じ、一方、普遍的に代々語り継ぐべき価値観を伝えることで、その時々々の現役学生と共に「新しい時代に挑戦」し、塾体育会バドミントン部の発展に微力ながら尽くしたいと考えている。

そのために、自分は「自分たちの頃は・・・だった。」という考え方で現役とは対峙しない。賛否両論はあるが、今の現役のみんなは、バドミントンに対する内に秘めた情熱も真剣な眼差しも、そのどれをとっても諸先輩方のそれらに勝るとも劣らない。強いて言えば、表現の仕方が違う程度である。しばしば合理性の追求と精神論は、矛盾するものとして捉えられがちであるが、決してそうでは

ない。重要なことは、結果を出すことであり、そのための明確な目標設定である。合理性にしても精神論にしても、そのプロセス自体が目標化してしまえば意味が無いのである。身近な目標として、今日の自分より明日の自分が着実に向上すること、そのために不断の努力が必要なことさえ判れば、必要以上の精神論は必要ない。あとは、最終的な目標をより具体的に持って、合理的な工夫と実践を積んでいだけだ。

創部100周年を期に歴史ある塾体育会ラグビー部も生まれ変わったのだから、60周年を迎える我がバドミントン部に出来ないはずは無い。先入観を排除して、新しい時代に挑戦したい。そのためには、何よりも多くの現役の仲間を部に迎え入れたいものだ。この点、OB 各位のご協力をお願いしたい。自分も1年1年を勝負と思い、塾体育会バドミントン部発展に一層尽力致す所存である。

創部60周年にあたって

主将 田添

亮

月日が経つのは本当に早いもので、私が我がバドミントン部に入部して早4年目を迎えることとなりました。

我が部は、今年で創部60周年を迎えるわけですが、考えてみれば日本中のどの大学もやっていた競技をいち早く持ち込み、体育会として発足させられた初期 OB の方々のパイオニア精神には尊敬のいたりです。活動以来60年を経た今日の体育会バドミントン部をあずかる身として現状を申し上げますと、残念ながら3部という厳しい状況にはあります。確かにかつての黄金時代を取り戻すには、個々の技量という面において相当の努力が必要であります。

また、名門慶應義塾大学への入試難がそのまま、質の低下へと向かいつつあります。しかしながら、現役部員一人一人は、この現状を打破し、自分達の可能性に常に挑戦しようと日々頑張っております。また、ここ数年は結果が出せずに苦悩してきた我が部ではありますが、去年は、男女揃ってのインカレ出場と、少しずつではありますが、明るい兆しも見えてまいりました。

古き良き時代は、もう既に化石となってしまった我が部がやらねばならないことは、現役の手で新たな戦績をつくることしかありません。今の我々にとって、堂々と胸を張れる戦績をつくってこそ、60年の重みをしょって立つ資格があると思っております。

諸先輩方々、今後もあらゆる方面で御指導をお願いします。我々も、諸先輩方の期待に応えられるよう、これからも日々不撓不屈の精神で精進していく所存であります。

